## 日本占領期の北京に生きた女性美術家・熊唐守一について

漆麟（京都大学）

日中戦争期の美術については、日本側の戦争画または中国側の木刻版画・漫画に代表されるプロパガンダの類が、多数の既往研究で論じられてきた。また、研究者らの関心は日本国内もさることながら、満州および南方に集中し、中国大陸の状況をほぼ看過している。その中、日本占領地である北京を中心とする華北政権下の美術に関しては、未だに研究が少ない。そのような既往研究の状況を踏まえ、本稿は日本占領期（1937〜1945年）の北京に生きた女性美術家の熊唐守一（Xiongtang Shouyi、1891〜1954年）を取り上げ、その事例研究を通して華北政権下の美術の一端を浮かび上がらせ、美術をめぐる政治的協力やジェンダーの問題について分析し、戦時中の美術家の姿勢および自己選択の実態を明らかにするものである。

熊唐守一は1914年に渡日し、東京の私立女子美術学校の西洋画科選科に留学し、1918年に帰国した。彼女は1925年に北平で女子西洋画社を創立し、翌年それを女子西洋画学校に改名した。その学校は小規模でありながらも当時の北平美術界において先駆的な存在であり高く評価されていた。1937年7月の盧溝橋事件後、美術家らが北京（1940年に北平が北京と改称）から脱出していく中で、彼女は北京に残ることを選択した。

日本占領期の北京で、熊唐守一は日本側と関わりながらも教育および制作をし続けていた。例えば、彼女にとって最も中心的な女子西洋画学校の教育では、全面戦争が勃発する前の1936年12月に、藤田嗣治を学校に招聘したことがあり、1943年より従軍画家の等々力巳吉を教員として迎えたこともある。また、彼女が1939年より北京大学工学院でも教授し始め、当時教員として在籍する建築家の山越邦彦とともに展覧会に携わった。制作では、1941年に彼女は中国の洋画家らと「中国油画会」を結成し、終戦までに4回の展示を開催した。日中共同出品の「中日油画展覧会」などの展示にも参加し、受賞を重ねた。1939年から1944年まで6回にわたる華北政権による最も重要な官製展の「興亜美術展」にも、彼女は出品し審査員も務めていた。彼女の娘である熊先蓬・熊先菱の二人も絵画に長け、「興亜美術展」に出品・受賞したことがある。また、彼女はしばしば新聞・雑誌の記事に登場し、家庭と両立しながらも社会に進出する新しい女性のモデルとして書かれていた。

それらの史実からみて、熊唐守一は占領期の北京ないし民国期の中国における重要な美術家の一人である。彼女は1954年に死去したが、その影響は潜在的ながらも中国現代美術の発足まで及んでいる。なぜなら、北京で初めて現代美術の傾向を示した1979年の『「無名画会」作品展覧』に参加した作家らは、女子西洋画学校が改名した熙化美術学校で熊先蓬・熊先菱に師事していた者である。道徳的判断が先行する戦後の美術史に消された熊唐守一のような占領期の美術家に対して、その生き方を見直し、美術自体の展開を長期的にみる視野から彼らの功績を改めて評価するべきであろう。